

School Counseling through School Cleaning

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/697

掃除をとおしたスクールカウンセリング

—非行生徒への関わりと、新しい道德教育の模索—

萱原道春

School Counseling through School Cleaning

Michiharu KAYAHARA

I はじめに

1995年度から開始された文部省によるスクールカウンセラー活用調査研究事業も6年間に亘る調査研究期間を終え、2001年度からは5カ年計画で全公立中学校にスクールカウンセラーを配置する国の事業がはじまった。この間学校現場に派遣された臨床心理士たちはそれぞれの経験を報告し互いの知見を蓄積してきた。筆者は1997年度からスクールカウンセラーとして働きはじめ、1校目の経験を萱原(2000)に報告した。そこで学んだことは、学校現場では受容と指導が対立的に捉えられがちであり、そこから教師間の対立も生じ易いということであった。またその結果、受容派の象徴のように捉えられがちなスクールカウンセラーが指導派の批判対象になりかねないので、スクールカウンセラーは教師集団の中であって常に集団全体を視野におきながら中立的態度を積極的に示さなければならぬということも反省の中から学んだ。

ここに報告するのは1999年度から2000年度にかけて2年間筆者が勤めた公立中学でのスクールカウンセリングの記録である。別室登校や友人関係の問題で生徒本人の面接をしたり保護者の相談等ももちろん受けたが、筆者がおこなった主要なしごとは掃除であった。発端は非行生徒(以下つっぱり生徒と呼ぶ)への関わりから始まったが、一般生徒の一部にも漂うケジメのなさを感じるにしたがい、関心は生徒に礼節や規律をつけさせるという道德教育的な事柄にも

広がっていった。スクールカウンセラーが掃除を中心に据えて活動をおこなった報告は見あたらないが、掃除をとおして、①つっぱり生徒に関わるときの受容と指導、②新しい道德教育の模索、という2つの興味深い問題がみえてきた。以下、2年間に亘る筆者の経験を報告し、この2つの問題について考察したい。

II 経過報告

この経過報告では登場人物が多いので読者の記憶を助けるために登場人物を太字で示し、主要な登場人物にはあだ名をつけた。SC(School Counselorの略)とは筆者のことを指すが、適宜「わたし」という主語も用いた。また、SCの感情を記述した部分を中心として、全体的に随筆的な文体で記述した。その方がその場の雰囲気やうまく伝わるのではないかと考えたからである。

なお、各回にトピックスが複数ある場合は、番号(①②…)をふり、簡単な主題をつけた。

平成11年度

4月 去年は大変だった

養教「昨年度は6~7人の3年男子の扱いに困った。グループになると保健室でやりたい放題する。相談相手がいると嬉しい」。

ある教師(女)「数年前自殺者がでた。その後職員間では、子供に対して共感的・受容的に接するようにとの申し合わせがあった。それから生徒の態度が荒れ出した」。

SC「それは本当の受容ではなかったのだと

思う」。

6月 SC, つっぱりたちとの関わり開始
(6/23)

中立派まとめ役先生がローカに寝転がって恐えーと腕相撲をしていた。黄髪頭は坊主頭のSCの姿をみると「お経唱えてください」「ここにもう少しそり入れて、サングラスして…」。そしてSCの髪をなでる。「カウンセリングって精神科とどう違うんや？俺の友だちの〇〇はカウンセラーでも絶対救えん」。

中立派まとめ役先生と黄髪頭の会話。「卒業してどうするんや」～「ホストになる」～「客に何か聞かれても、勉強しなかったのわかりませんでは、相手にされんぞ」。

この後、中立派まとめ役先生は恐えーをつかまえて柔道の組手。恐えーの腕を逆手にとる。それを見ている黄髪頭「喧嘩じゃー」。中立派まとめ役先生が去った後。恐えー「力強いや」。黄髪頭「お前が力弱いんじゃ。あんなのみぞおちに一発いれてやったら終しまいじゃ」。

SCは二人と話す。黄髪頭「授業なに言っとるか、わからん。それに〇〇先公の腐れ授業…」。SC「授業さぼっても、することなかったら面白くないだろう」。恐えー「でも、教室で座るとるよりまし」。

授業が終わり、ほかの生徒たちがローカを通りはじめる。ある教師(女)「あんたたち、そこで座ってたら邪魔でしょう。立ちなさい!」。SCはホームルームに戻る二人を追いかけ、「また、来いや」と声をかけた。

(6/30)

①保健室での出来事

授業をさぼってエスケイプ中の黄髪頭、恐えー、ほか2人が保健室にたむろしている。途中、ある教師(男)が来る。黄髪頭が歯向かい、一時険悪な雰囲気になる。黄髪頭はいったん保健室を離れるが、しばらくするとまた保健室に舞い戻る。養教は必死で彼らを諭そうとするが、空回り。

②SC, 保護者からの苦情を聞く

保護者「相談というか、苦情というか。先生に対する子どもの態度がよくないのは分かっているが、ある女の先生が、子どもにひどいことを言った。それで、子どもはその授業がある日は学校に行きたくないと言っている。あの子は根は単純な子なんです。担任の先生から子どもに声をかけてくれるよう伝えてください」。

③エスケイプ組への対応について養教に進言

SC「指導しても教室に帰すことはできないのだから、今のように押し問答しても無駄だと思う。言葉を減らして、まず彼らの言うことに耳を傾けたらどうか。関係を作ることが先決だと思う」。

養教「教室へ帰るように指導するのが筋だという思いは変わらないが、先生が言われることを試してみようと思う。でも、わたしにはそのような力量はないし、あれだけの人数の生徒を相手にすることはとてもできない」。

(7/7)

養教に応答技術を説明する。真剣に聞いている。

(7/14)

①エスケイプ中の恐えー、黄髪頭とカウンセラー室^(註1)で話す

「さっき姉御先生に追いかけられた」から話がはじまる。部屋にはほかに誰もいなく、落ち着いて話をすることができた。ものを作るのが好きな恐えーは卒業後建築関係のしごとに就きたいと言う。黄髪頭は、高校は行きたいが、何のために行くかは決まっていないと言う。

②姉御先生

SC「彼らを追いかけた？」との問いかけに、「教室に連れ戻そうとしたのじゃない」と、すこし慚然とした様子。この後、エスケイプ中の恐えーが職員室に顔を見せる。姉御先生は彼と並んで床に腰を降ろし、話をする。恐えーはすごく嬉しそうだった。この間、隣でてやんでー先生がその様子を見ていた。

③てやんでー先生と話をする

てやんでー先生「古い考えかもしれんが、教

師がそこまで降りてやる必要はないように思う」。

(註1) 面接をする場所というより、カウンセラーの居場所。別室登校をしている生徒の居場所でもあるし、休み時間には生徒たちが思い思いにやってきて、ゲームやおしゃべりをしている。

(7/21)

恐えーと黄髪頭がホームルーム前に保健室にやってきて、ベッドに寝そべる。その様子を見ていると「なにを勝手なことをしてるんだ」と言いたくなる気持ちも確かにわかる気がした。

養教は「教室に帰るように」と言うが、以前より落ち着いて二人の相手をしている。二人は毛布を頭まで掛けて、甘えている。「ほれ、起き」とSCが手を差し伸べると、二人は素直に言うことを聞いた。

9月 教師間の軋轢強まる：「けじめ派」VS「擁護派」

(9/22)

①養教、がんばる

休み時間になると保健室にどっと生徒たちがやってくるが、養教はテキパキとエネルギーに対応している。「先生はふけている」とからかう黄髪頭に対し、「顔はブスでも生き活きと働いていれば、いい顔になるでしょ」と養教。

②黄髪頭と気持ちを交わす

SCはベッドで寝ている黄髪頭に話しかけた。途中から養教も加わる。黄髪頭は素直にいろいろと話をしてくれた。「高校は今の状態を考えると行っても途中でやめるだろうから、行かない。東京に行ってホストで金を稼いで、北海道や九州を旅したい」。SC「沖縄もいいんじゃないか。むこうで住み込みで働いてダイビングというのはどうか」～「ほく、泳ぎだめなんよ」。そのあとしばらくして、黄髪頭「ほくは自分からはあまり怒らんよ。いろいろと気をつけている」～養教「確かにそういう所はあるかもね」～黄髪頭「一番嫌いな野郎は××(先生)の野郎。耳がちぎれてもピアスを外すもんか」。

素直な表情で話をする黄髪頭に対し、養教は「いい子やのにね」といった表情でじっと彼を見つめた。黄髪頭「なん、なんなんやー」。

③元気なんかでねえよとてやんで一先生

元気なんかでねえよが保健室のベッドで寝ている。SC、彼に話しかける。「しんどい」と言う。そこに担任のてやんで一先生がやってきた。先生はきびしい口調で諭し、「なんや、こんなもん!」とピアスを外させる。てやんで一先生は家庭訪問のとき見たという、元気なんかでねえよが小学4年生のとき作った版画「疲れた」に触れる。「すごくうまかった。先生にはとてもあんなのは作れない。あんなのができるのだから、頑張つてやらにゃ」。

この後、職員室でてやんで一先生が「さきほどは失礼しました」とSCに声をかけてくる。SCは「4年生のころからずっと疲れていたのか、ということに触れてみては」とアドバイスした。拒絶的ではないが、自分の信念はそう簡単には曲げないよ、といったてやんで一先生の様子だった。

(9/29)

「つっぱりたちを甘やかしている」と擁護派先生(姉御先生、m男先生、n男先生)に対する批判が表面化する。そして職員会議でつぎのことが決定された。a) つっぱりたちにけじめをつけさせる、b) 姉御先生とm男先生は私物を相談室から撤去する、c) 教師が随伴できない時は相談室に鍵をかけ、彼等にたむろさせない。

(10/6)

(午前) 保健室にはエスケイブ組がいた。黄髪頭の髪の毛がさらに黄色くなり、ピアスの穴も鉛筆が通るくらいの大きさに広がっていた。原因は、数日前、「あいっだけ特別扱いするわけにはいかない」という〇〇先生に黄髪頭が歯向かっていって、投げ飛ばされたことにあるらしい。

保健室の戸が開き、姉御先生とm男先生が保健室に入ってくる。せわしない様子で「さあ、

さあ」と彼らを連れて出て行く。

(昼休み)黄髪頭たちつっぱり組に、普通の生徒も加えて10数人が玄関でたむろしていた。そこに加わる。途中黄髪頭がいきなりいじめられっ子つっぱりに野球ボールを投げつける。途中、ローカを通ったけじめ派ご意見番先生が険しい目つきを投げかけた。掃除がはじまるとつっぱりグループ以外の大部分は掃除に向かった。結構まじめな子たちだった。

(放課後)教育相談委員会で、エスケイブ組への対応をめぐってご意見番先生と議論を交わす。ご意見番先生はエスケイブ組から反抗的な態度をとられている様子。きびしい指導を主張する。

帰宅途中、SCは玄関先で姉御先生と出会う。けじめ派のご意見番先生やてやんで一先生との対立について触れる。「しんどい」と言いながらも「風当たりがあるのは一人前に見られている証拠であるのかも」と言う。教師としての自信を築いている最中なのだなと思う。

(10/13)

黄髪頭は先週の土曜日、いったん髪を黒く染めたそうである。しかし今日はまた元通り。明日の遠足を前にして、担任の擁護派 m 男先生は「髪を黒くしたら連れていく」と彼に伝えていた。もし黄髪のまま来たら彼だけ一人自分の車に乗せて連れていくつもりだと先生は言う。

昼休み、SCは相談室を訪ねた。m 男先生と黄髪頭が楽しそうに話をしていて。途中、姉御先生も加わる。「黄髪頭の将来が楽しくなるように考えてるんだから、お前も考えんかい」と、SCは黄髪頭に声をかける。「先生助けてくれー。さっきから、からまれとる」と、黄髪頭。二人の先生の側にいる黄髪頭の表情は素直だった。

(10/20)

①元気なんかでねえよ、柔道、擁護派 m 男先生

授業エスケイブ中の元気なんかでねえよと柔道と出会う。体格のいい柔道は伏目になる。話

しかけると小さい声で「教室にもどる」と言うが、たぶん戻らないだろうと、その後 SC は校庭を見まわったが、見つからなかった。玄関で m 男先生と出会う。やはり教室には戻っていないとのことだった。m 男先生は車で外へ見回りに出かけた。結局、二人は校内にいたことが判明。うち元気なんかでねえよが保健室へやって来る。しばらくして外回りから帰った m 男先生が保健室をのぞく。SC が「m 男先生が車で探しに行ったんだぞ」と言うと、元気なんかでねえよはやはり嬉しそうであった。m 男先生「そういう所は素直だな」。

②最近、保健室に1年生の新顔(つっぱり新規参入組)が増えている

養教の対応はすこし荒っぽくなっていた。新顔が増えて、くさびを打っておかないと大変なことになるという思いがあるのだろう。

③黄髪頭

「黄髪頭の将来のこと…」と話しかけたが、「そんなこと話してどうするんや」といった様子で、その場から立ち去った。黄髪頭を追って校舎内を歩く。悪い気はしていない様子だ。途中そうじのおばさんに出会う。タバコのポイ捨てでおばさんに迷惑を掛けているくせに、「信用できるんは、おばちゃんだけや」などと調子のいいことを言う。

(10/27)

①柔道、タオル

カウンセリング室の窓の外に煙が見えた。見ると隣の保健室の窓の下で柔道、タオルがタバコを吸っていた。「いかんぞ」と叱ると、窓から入れてくれと甘えてくる。「授業に出なよ」と言う。「うん」と素直な返事が帰ってきた。柔道はそのまま授業に出たようである。

その後、タオルと元気なんかでねえよが校内をうろついているのと出会う。彼らを姉御先生のいる相談室に連れていく。タオルが「おっちゃん(SC)に、授業に出ると約束した」と言う。姉御先生は「おいで」と言って二人を教室へ連れていった。

放課後、柔道がカウンセリング室に友だちを探しに来る。SC「授業出たか？」～「うん」～「(疑って) わるい」～柔道「ありがとう」と言って部屋を出て行く。

(11/10) 嘔まれてショック、気持ちを引き締める

前日の文化祭では、元気なんかでねえよたちが、父兄にも悪態をついていたとのこと。

①養教

「1年生に暴力を振るいそうになった黄髪頭を止めようとして、肩を押された。ショックだった。これまで築いてきた信頼関係は何だったのかと。昨日は、それで学校を休んだ。今日はエネルギーが出ないので保健室を閉めて職員室にずっといる」「もっと本気で関わらなければいけないですね」とポツリと言う。

黄髪頭が単車を無免許運転していて、転倒し、ピアスの穴から下の耳たぶがちぎれたという話がでる。そこにギンギンにつっぱった黄髪頭が職員室の戸口から顔を見せる。SCが「入ってこんかい」と声を掛けるが、黄髪頭は無視する。上調子の関わり方をしたと反省する。

②自由室

自由室の方で大きな物音。鍵がかかっているのをつっぱりたちが壊した様子。タオルは「おっちゃん」と言って腰にすがりついてくる。鍵を壊した柔道はニヤニヤと笑い不遜な態度。

部屋の中に入る。タオルは棚に並べてある教材の中から英語のドリルをもってくる。be動詞の項をいっしょにやる。ワン・ポイント・レッスンを書いてやると、「すぐわかり易い」と言って、タオルはその紙片をポケットにしまいこんだ。

③SC、放課後つっぱりたちに絡まれる

帰宅するため駐車場に向かうSCは、自転車置き場でつっぱりたちがたむろしているのと出会う。「今日はちょっと気が進まないな」と思いながら、彼らに声をかける。柔道が「さあ来い」といったポーズをとる。髪を触っていいかと聞いた後、ジャンパーを撫で回す。親愛と攻

撃が一緒くたになった感じ。SC、緊張する。その様子を見ていたタオルが、困惑した表情で「やめとけ。完全に無視されとる」と言う。

黄髪頭「趣味でカウンセラーやっとなるんか」「なんや、こんな不細工な靴はきやがって」。

尻毛「カウンセラーの先生、ちょっと悩み事があるんですけど。けつの穴に毛が生えているんですけど」。

元気なんかでねえよ「そのおっちゃん、強いぞ」。

帰宅後もしばらくは嫌な気持ちがつづいたが、黄髪頭から言われた「趣味でカウンセラーやっとなるんか」は、そのとおりだと思った。これまでとってきた「ニコッ」戦略^(註2)の底の浅さを反省する。そして、自分の中にある硬派の部分(なめたらいかんよ)をプロに徹することで彼らに示そうと決意する。結論はカウンセリングの原点に戻る、ということだった。すなわち、①相手の毒に動じず、嘘をつかない^(註3)、②冷静に相手の出方、心の動きを追いつづける^(註4)である。

(註2) 以前テレビで、元非行少年であった個人実業家の話を聞いたことがある。終戦当時駅でたむろしていた彼に宣教師がニコッと微笑みかけたそうである。「これには参った」とその実業家は言っていた。それを踏襲した戦略だったのだが、所詮背後にある構えが宣教師とは比較にもならなかった。

(註3) 嘘をつかないとは、愛想など、自分の気持ちに不自然なことはしないという意味である。

(註4) ふつうは「相手の心に添う」だが、この時わたしは戦闘体制に入った直後だったので、むしろ「追いつづける」という気持ちに近かった。

(11/17)

①姉御先生

廊下で姉御先生に呼びとめられる。話し方や身のこなしがどこかつっぱり風。同一化するほど深く、彼らと関わっているのだと思う。相

談室明渡しの件で、率直な気持ちを語ってくれる。

②教育相談委員会

つっぱりたちに対する指導方法について討論。はじめ派ご意見番先生の考えを聞く。途中、SCは以下の概念枠を板書して、先生方の話を整理しながら聞く。

(目的) きちんとした生活を送れるように指導する。 — 誰もが一致 —

(手段1) いかんことは、いかん。

(手段2) まず生徒の懐に入りこむ。

討論のなかでご意見番先生は彼らに対する腹立ち等、率直な気持ちを語ってくれた。「この学校で先生は3人だけや。あとはみんなカスや、と言ってるんですよ!!」。最後に、SCがひじょうに感銘を受けたある校長先生の学校立てなおし実践記録(塩野入, 1993)をご意見番先生に渡すことを約束する。(後日、本を返される時、ご意見番先生から「これは第一級の教師ですよ」「SCさんとはまた議論しなければいけないね」という言葉をもらう。)

(11/24)

①元氣なんかでねえよ、タオルを先生方数人が追いかける

「窓ガラスが割られたり、黄髪頭にはじめ派C子先生が蹴られたりして、大変だ。どうしたらいいのか。先生、彼らの気持ちを聞いてください」というある教師(女)からの話を聞いていると、職員室の外が騒がしい。エスケイプ中の元氣なんかでねえよとタオルを、授業の空いている先生数人が校舎内から校庭へと探し回っている。外は雨が降っていた。先生たちが職員室に引き上げた後、SCは校舎内で彼らを発見し、話をする。

元氣なんかでねえよ「傘をさして追いかけているようじゃダメだ。先生のプライドを捨てて、追いかけてこなければ」「姉御はダーと追いかけてきて恐かった」「てやんでーなんて、そんな根性ない」。

②5限目、エスケイプ中のつっぱりたちと相

談室で1時間過ごす

元氣なんかでねえよがとりとめもなくもう一人に話し掛けるだけで、あとは、机をベッドに眠ったり、黙って話を聞いているだけ。動きといえば、途中、一人がいきなりいじめられっ子つっぱりの腕を思いっきり殴ったりするくらいである。SCは終始黙ってそこに座っていた。この場の雰囲気のを例えると、居場所というよりは防空壕のようだったと思った。

③放課後、相談室と自由室を掃除

さきほど居た相談室と、自由室をそうじした。とくに自由室は彼らつっぱりが暴れたせいで、天井は穴だらけ、先生方が揃えた教材や進路資料などが散乱しているといった惨憺たる状態であった。それらを片づけた。彼らに対する腹立ちはなかった。彼らの居場所をもう少し居心地よくしてやろうという若干の愛情と、荒れを放置しておくわけにはいかないという、ある種の決然とした気持ちだった。いろいろな物を片づけている最中、なかに校訓のひとつである「清く・正しく・美しく」と墨書された額が傾いて壁にへばりついているのを見つけた。それを拭いてきちんと壁に掛け直した。このような状況で改めてこのような言葉を眺めてみると、いい言葉だと思った。

(12/1)

①はじめ派C子先生

3年の先生方が順番で自由室を見回ることになる。今日の当番ははじめ派C子先生だったが、先生が自由室に居たつっぱりたちに声をかけると、彼らは奇声を挙げながらコンピューター室に閉じこもってしまった。その中へSCは入っていった。会話はほとんど交わさなかった。しばらく彼らと一緒に居たのち、「暇ができて、勉強しようと思ったらいつでも声をかけてくれ」と言ってから退室した。タオルは素直に聞いていた。元氣なんかでねえよは「暇なんて…」と、ボソッと言った。

この後SCはC子先生に声をかけた。C子先生が先日タオルを指導しようとしたが、彼は自

分自身の服を引き千切って抵抗したとのこと。運動神経がよく、音楽や美術の才能もあり、あまり乱暴なことはしない彼をC子先生は目にかけていたが、この出来事で信頼関係を壊されたと感じ、落ち込んでいる様子であった。

②みかんの食べかすを拾う

みかんの食べかすが沢山校舎の軒下に散乱している。SCはそれを素手で拾い集めた。「おじちゃんかっこいいよ」と2,3階の窓から野次がとぶ。近くに唾も点点と落とされていたが、たいして汚いとも思わなかった。「糞とくらべたら、どうってことない」という気持ちだった。その様子を近くで見ていた**タオル**は野次をとばしている下級生たちに向かって「お前らも降りてきて拾え!」と叫ぶ。

(12/8)

①黄髪頭

ひさしぶりに黄髪頭とローカで出会う。「おはよう」と声をかけると、すこし決まり悪そうだが、「うん」と答える。

この後、SCは相談室で**保護者(女)**の相談を聞いていた。面接が終わると戸の外で**黄髪頭**が立っていた。黄髪頭を知っているという**保護者(女)**は声を掛けた。黄髪頭は素直に答える。穏やかな表情である。

保護者(女)「おばちゃん、黄髪頭君のこといつも心配しているのよ。耳はどうなったの?」

黄髪頭「治った。でも、また穴を開けた」

保護者(女)「こんないい子なのに、どうして時々乱暴になるの?」

黄髪頭「いつもはこんなんだけど、バカにされたと思ったりしたときに、あんな風になってしまう」

②タオル

全校生徒は講堂に集まり、校舎内に生徒の姿はない。校庭を一人で歩いている**タオル**の姿を見つける。窓から「上がってこいや」と声をかけると、「カウンセリングやー」と言いながら走り去っていった。いじらしい気がした。

③自由室をそうじ

机に赤チョークが塗られていたりして、この前そうじしたのにまた部屋が殺伐としていた。しかしひどい破損などはない。ほんとうに荒れていたらペンキが塗られるだろうと思いながら、部屋の中を片づけた。棚の上も整理して、万一彼らが手にとらないだろうかと、「基礎ドリル」を並べておいた。

部屋を出ると、雨天練習中の野球部と出会う。やけに清清しかった。

(12/15)

①生徒会室をのぞく。

3年女子1人、3年男子1人がいた。つっぱりたちをどう思うか尋ねる。男子「ぼくたちには関係ない。あんなことをして損するのは自分らだ」。女子「黄髪頭君は同じクラス。同じクラスの仲間だから、やっぱりクラスに戻ってきてほしい」。

②擁護派姉御先生、n男先生

姉御先生「他の先生がぜんぜん分かってくれない」「自分でも生意気な口をきいていることは分かっている。だけど、言わなければ」。SCは、十分に不満を聞かないうちに説教がましいことを言うのはどうかと思ったが、「けじめ派の先生たちと敵対してはいけぬ。せつかくのあなたの努力が報われなくなる」と彼女に言った。

n男先生「1年生の**保護者会**^(註5)では、われわれのやり方に反対意見もあって、ほんと、針の筵だった。でも、賛成してくれる人も2人いた。3年かけてじっくりやる。今に見とれ、という感じ」。

(註5) **n男先生**は1年生の担任。この頃、黄髪頭たち3年生の影響をうけて1年生の乱れも大きくなっていった。クラスメイトに対する暴力事件なども生じ、**保護者**から「なんとかしろ」という声が高まっていた。

(1/19)

姉御先生がけじめ派の先生方ともいろいろと連絡をとるように努めているとのこと。

(2/9)

①タオル

荒涼とした自由室で一人昼食をとっているタオルをみかける。彼と会うのはしばらくぶりである。タオル「今までどうしたんや!」とSCを非難する。こんなにストレートに求められてジンとする。しばらくすると他のつっぱりたちもやってくる。

そのうち、先生方数人が部屋を片づけに来た。先生方は黙々と片づける。力対力の構図はなかった。黄髪頭の様子をみると、自責の念が含まれているかと思われるような、けっこう神妙な顔をしていた。すくなくとも反抗的な態度はなかった。唯一元気なんかでねえよが「どうせ、俺らは悪党や」とポツツと言ったぐらいであった。

部屋を出ていったタオルを探して、校庭で彼を見つける。「しばらく会えんで悪かった」と謝る。わかってくれたようであった。その様子を、あとを追ってきた元気なんかでねえよが見て、うなずいていた。

(2/16)

①がらんどうの自由室

片づけてもすぐに荒らされるので、「いっそ、何も置かない方が」と、自由室は先生方によってすべてが取り除かれ、がらんどうであった。部屋に入ってきたSCの姿を見て、黄髪頭が「また、来たー」といった表情。SC、タオルの隣に座る。それを見て黄髪頭「父ちゃんと、息子みたいや」。タオルは二、三言SCに話しかけると、部屋を出ていった。黄髪頭も出て行く。後には2,3人のつっぱりたちが残った。そのまま彼らと1時間ほど、その部屋で過ごした。SCは、一言二言しゃべっただけで、ほとんど無言でそこに座っていた。部屋の中はそれほど寒くはなかったが、もちろん暖かくはなかった。4限終了のチャイムが鳴る。それを待っていたように、つっぱりたちは部屋を出ていった。

給食の時間、配膳室から出てきた元気なんかでねえよに「かぜひくなよ」と声をかける。

昼休みの時間、つっぱりたちは校庭で雪合戦をしていた。その中にいた元気なんかでねえよに、担任のてやんでー先生が声をかける。「あす〇〇忘れずにもってこいよー」。

(3/8)

今日は公立高校の入試日。つっぱりたちもいない。自由室の黒板に別れのことばを書いた。「3年つっぱり軍団へ：あんまり無茶をせず、元気で頑張れよ」。

(3/16)

「そうじ部」を設立し、本格的に活動することに決める。部員はSC1人である。3時間ほどかけて全校舎のローカをそうじする。1年生の教室前では給食のプリンが散乱していた。

平成12年度

この1年間は「そうじ」がSCの活動の中心となった。つっぱりたち^(註6)との関わりも、そうじを通しておこなわれた。また「けじめ・規律を刻みつける」という点では、SCの照準は全校生徒、とくにつっぱりたちに乗じた「ふざけ組」に向けられた。

(註6) 黄髪頭たちが卒業したあと、つっぱりの中心は新2年生となった。

(4/12)

①ドブそうじ

午前中、校庭と通学路のドブそうじをする。ドブには本校の生徒たちが捨てたタバコやジュースの空き缶、ガムの包み紙、折れた傘などが散らばっている。ほかに古タイヤも捨てられていたので、それらを拾ってゴミ捨て場に運ぶ。その様子を新2年生のつっぱりリーダー、そりこみが窓から見ている。振り向くと「こんにちは」と挨拶してくる。

②2年つっぱり組

放課後、2年つっぱり組4,5人がカウンセラー室へやってくる。挨拶に来たと思うのだが、口からついて出ることばは、「つまらん。何かおもしろいことないけ」「掃除は、金もろうとるん?」など。

(5/10)

校舎裏の草むらをそうじする。中からへびが出てきたので、おっかなびっくり。その様子をつっぱり2人が見て笑っている。ちょっとムツとして「しょうもない野郎だ」とSCは呟く。その後、校内のドブに捨てられていた古タイヤを運んでいるところに、さきほどのつっぱりが「おっちゃん」と声をかけてくる。「もって行ってやる」と言って途中までそのタイヤを運ぶ。自転車置き場までくると「あとは自分で持っていってくれ」と言う。あまりこちらをなめるつもりはなくても、身についた態度で、ああなってしまうんだと思う。

帰宅時、先ほどつっぱりたちが群れていた自転車置き場を見ると、ガムの包み紙が散らかっていた。片づけて帰る。

(5/17)

①そうじ中、何人かの生徒が声をかけてくるまじめに掃除をしている生徒は本当に少ない。それを横目で見やりながら、SCは黙々と校庭を掃除していた。途中、男子2人組、女子2人組が話しかけてきた。ふた組とも「ありがとう」と言ってくれた。

5限目は中庭そうじ。紙飛行機、給食の食べかす、手紙をびりびりに破った紙片などが散乱している。授業よりもSCの行動の方が気になるのか、窓際に座っている2,3人の男子生徒がこちらを見ている。そうじを終え、校舎内に戻るため窓を飛び越える^(註7)と、その男子生徒は「よっしゃ!」といった仕草を見せる。「ほんと、パフォーマンスだわ」^(註8)とわれながら思う。

放課後、2年男子(ふつうの子)が教室からトランプを中庭に落として遊んでいるのを発見。教室まで行って注意する。そこに準つっぱり男子1人がやってきて、その生徒に「いかんぞ!」と注意する。そしてSCのことを「いい人や」と言う。

校舎内をそうじしているSCにある教師(女)が「ごくろう様」と声をかけてくる。「つばを吐いてるでしょ。わたしもティッシュを持

ち歩いて、気がついたら拭いているんですけど」～SC「彼らを上回るパワーできれいにしてやろうと思っているんです」～「やっぱりそれしかないですよ。先生、汗びっしょり」～SC「クラブ活動ですのぞ」(笑)。

(註7) 変な造りの校舎で、中庭に直結しているドアがないので、窓から出入りするしかない。

(註8) 人に見せるためにそうじをすることなど好みではないが、生徒たちに見てもらわないことにはメッセージが伝わらない。

(5/24)

①米米クラブとナオミ

小屋でゴミを捨てていると「おっちゃん」と声がする。振り向くと物陰にエスケープ中の米米クラブ(2年男子)とナオミ(2年女子)がいた。二人で何をしていたのやら知らぬが、ともかく、二人とも全然つっぱった様子はない。米米クラブ「授業でもつまらん。掃除でもしている方がいい」。いっしょに通学路のドブをそうじする。途中、米米クラブが履いていたスリッパをドブに落とし、それをそのまま履こうとするので、草をむしって汚れを拭いてやった。ドブそうじのあとは、校舎の窓から落とされた、びりびりに破られた紙片を拾う。細かい作業だが二人とも丁寧な拾った。手を動かしながら二人と話をした。ナオミは両親が離婚していて、将来は犬のトリマーになりたいという。犬がすごくかわいいと言う。淋しいのだと思う。

(5/31)

①そうじ

雨のなか校庭をそうじした。相変わらず、窓から外に捨てられたゴミが多い。傘をさしていたが、服がべとべとに濡れてしまった。しかしクラブ活動だから少々の雨ぐらいで休むわけにはいかない。

②てやんで一先生

てやんで一先生から声をかけられる。「わたしも昨日中庭をそうじした。つぎからつぎへと捨てられて、賽の河原だけど、お互い頑張りま

しょう」。

(6/7)

そうじ時間、校庭でぶらぶらしているつっぱりたちに向かって、窓から2,3人の男性教師が声をかけている。その中の1人中立派まとめ役先生が「愛してるよー」と彼らに声をかけた。その後「愛してるなんて、何年振りに言ったやろう?」とボソツと言う。思わず笑ってしまう。

(6/14)

校庭をそうじしていると、掃除のおばちゃんと出会う。「お互い、がんばりましょう」と挨拶を交わす。

剣道部部室の裏。窓からジュースの空き缶やトマトの食いかすなどがまた投げ捨てられていた。「武道をしている者がなにやってんだ!」と思うが、徹底的にきれいにしたら彼らもゴミを捨てにくくなるだろうと思直して、片づけにとりかかる。部屋の中にいた部員に「投げ捨てるのを見たら、注意するように」と協力をお願いする。

放課後、運動場のそうじをしていると、部活動中の何人かの生徒が「ご苦労様」と声を掛けてくる。

(6/28)

①ミルクが降ってくる

中庭をそうじしていたら、上からミルクが降ってきた。危うくかかりそうになる。「なんてこと、しゃがる」と、その湿ったやり口に腹が立つ。あたりをつけて、3階の教室に入っていた。窓の棧にストローをつきさした牛乳パックが2個置いてあった。横にはおとなしそうな男子生徒が2人いた。証拠がないので何も言わず、無言で牛乳パックをもち去った。途中、ローカでつっぱりたち4,5人とすれ違う。「こんにちは」と挨拶してくる。一人はつっぱりた物言いをするが、わたしの表情が険しかったのか、言い直す。

②校内研修会

講師はSC。この学校で先生方全員を相手に話をするのはこれが初めてである。いつもは「で

しゃばらないように」を心掛けていたのだが、この日は講師としての役目が与えられているので、積極的にメッセージを先生たちに投げかけた。

最初に述べたことは「わたしも基本的にはピシッとしたのが好きな人間です」であった。そのあと、「ただ、けじめ・規律は懐に入りこんで刻みつけるものだと思う」とつぶけた。わたしの話が終わり、ディスカッションでは、おもにけじめ派の先生方から率直な発言をもらった。

てやんで一先生「自分はこの‘まずい応答例’に該当する。しかし、人間にはそれぞれの個性があつて、「うん、そうだね」なんて、自分は絶対聞けない。――むかし担任していたつっぱりで、そいつのことを何回も殴りつけたが、卒業してから親から『ただふんふんと聞いてくれる先生より、てやんで一先生の方が信じられると息子が言っていた』と言われた」。

SC「その生徒には先生の気持ちを受けとめられるだけの度量があつたのでしょうか。でもみんながそうではない」。

体当たりケジメ先生「学校の先生はカウンセラーにはなれないと思う。――茶髪やピアスを受容などできない」。

SC「そんなことを受容してもしかたがない。受容するのは背後にある心です。ピアスはダメだ、いや直さない、と表面的な事柄で押し問答しても無駄だから、とりあえずは『あ、そう』ということですよ」。

研修会が終わった後、かねてより気になっていた、夜グラウンドをつかう社会人野球のタバコのポイ捨ての件について校長先生に相談する。SC「掲示板を作ってネット裏に貼りつけてもいいですか?」校長「ぜひ、やってください。前々からわたしも言っているのだが、直しやがらん」との返事。

(7/5)

①つっぱりたち

午前中、校庭を掃除していると、エスケイブ中のつっぱり二人と出会った。一人は新顔。声

を掛けるときちんと挨拶をして、校門を出ていった。あと一人はそりこみ。「昼からまた出てこいや」と言うと、嬉しそうな表情を見せる。彼もきちんと挨拶をして帰っていった。気持ちのいい奴らだと思ふ。

②ふざけ組

軒下を掃除していると上から水が飛んでくる。見ると普通そうな女の子たちが3,4人顔をのぞかせる。「あかんぞ」と言うと、「すみませーん」という声が返ってくる。

玄関で枝切れを叩いて散らかしていた男子生徒4,5人のグループと遭遇。これも、ふざけ組。校舎を汚す主犯格は彼らのような生徒たちかもしれないと思う。注意すると「自分たちはやっていない。さっきまでここに居たデブがやった」とウソをつく。黙ったままわたしが散乱した枝を拾いはじめると、そのうちの二人が手伝いはじめめる。思ったほどひねくれてはいなかった。

③応援してくれる生徒たち

校庭を掃除していると、女子生徒2人が窓の向こうからこちらを見ている。目をやると、手を振って笑顔で挨拶してくれる。元気が出る。

つぎに運動場の掃除。クラブ活動中の生徒たちが何人か「ご苦労様」と声を掛けてくれる。じゅうぶん報われた気持ちになる。最後に、気になっていた部室棟裏の草刈と、水飲み場の掃除をおこなった。運動場隅の溝に捨てられた古タイヤや半分土に埋もれたシートなど大物の撤去からはじまり、投げ捨てられた缶やプラスチック容器等のゴミ集め（特に部室棟裏がひどかった）へと進み、最後に草刈をして、運動場の美化はひとまず完了した。校庭や運動場はエリアは広いが、いったん徹底的に掃除すると、あとはそれほど大変なしごとではなくなった。

(7/12)

①そうじ

昼前、通学路のドブをそうじしていると、登校途中のつっぱりが一人横をとおる。目が合うと挨拶をしてきた。それから彼は校門へと向か

って行った。あとで自転車置き場の横を通ると、おそらく先ほどの彼が乗ってきたと思われる自転車が横倒しで放置されていた。自転車にはスタンドがなかった。起こして、自転車置き場の支柱に立てかける。その他数台のはみ出した自転車も整理する。

放課後は運動場のそうじ。部室棟の裏を点検すると、野球部の所がまた汚れていた。窓からのポイ捨てである。中に数人の部員が居たので、その旨を告げる。素直な返事が返ってくる。汚すのは一握りの生徒だろう。あとでキャプテンがわたしの所へやってきたので、時々チェックするようにお願いする。

②てやんでー先生

てやんでー先生が「来るな！学校へ」とブツブツ独り言。話を聞くと、米米クラブに注意したらあとで便器を破損したとのこと。その件で彼の母親が「学校の先生にももっと理解を」と言ったらしい。「なにが、理解をじゃ！」とてやんでー先生。以前ご意見番先生に渡した本を渡す。「わたしには、こんなのは合わない」と言う。「硬派な校長先生の実践だから、きっと先生にも合うと思いますよ」と伝える。

(9/6)

①つっぱりたち

つっぱりたちのはみ出した自転車を別棟の自転車置き場に移動して整理していると、2階の窓から「自転車パクッとるんか」とつぱりの一人が声を掛けてくる。帰りにも彼は「おっちゃん、バイバイ」と声を掛けてくる。

米米クラブと出会う。わたしに対する態度がこれまでとすこし違う。気が立っている様子であった。

ナオミがもう一人のつっぱり女子といっしょに校庭を歩いていた。強面の雰囲気ですべて歩いている。午前中の校庭そうじ中拾った彼女の上履きシューズの件で、「受け取ったか？」と尋ねると、「うん、ありがとう」と答える。

(9/20)

①つっぱりたち

米米クラブと出会う。SC「どうや、イライラは治まったか?」～「うーん、まあ」。

校庭のそうじをしていると外からつっぱりたちが数人帰ってくる。どぶに空き缶を捨てる音がする。声をかける。「空き缶捨てたらあかんぞ。また俺が拾わな、いかんやないか」。缶を捨てた一人が、「おっちゃん、ごめん」と答える。

午後ドブそうじの最中、エスケイプして学校から帰る彼らとまた出会う。「おっちゃん、さっきの缶、どうしたん? あんなん〇〇(缶を捨てた奴)に拾わせたらええのに」～SC「もう、学校には来んのか?」～「うーん? また明日来るけど」～「バイバイ」～「バイバイ」。

(9/27)

①つっぱりたち

校庭そうじ中、エスケイプ中の米米クラブら3人と出会う。各自がジュースの缶を手にもっている。わたしの姿を見て米米クラブが「おう、おう」とつっぱりで肩を揺すりながら声をかけてくる。SC「イライラはどうや?」～「まだちょっと続いとる」と素直な返事。その後「缶、ちゃんと捨てとくから」と言う。別の一人がふざけてジュースを口から噴き出してもう一人を追いかけしている。追いかけられている方が「おっちゃん、助けて」と言う。わたしはとくに相手はしない。彼らはわたしの後をついてきて飲み終わった缶を差し出す。わたしはポリバケツ^(註9)を差し出し、その中に缶を入れさせた。

②ゴミの量がずいぶん減ってきたのを感じる

原因を確かめるため、掃除のおばさんと一人の先生に尋ねてみたが、先生方で常時校庭のそうじをしている人はいないそうである。生徒たちが変化してきたのだらうと思われる。

(註9) 外回りをそうじするときの必須アイテムの一つ。あと一つは火ばさみである。

(10/25)

①米米クラブ、ナオミ

給食前に登校してきた二人を見かける。「給食を食べろよ」と声をかけるとナオミからは「あ

りがとう」という返事が返ってきた。米米クラブはまだつっぱりしている。気の済むまでつっぱり必要があるのだらう。

②そうじ

今日もバケツの中のゴミの量は少ない。波がスーと引くように、気がつくときと激減していたといった感じである。掃除のおばさんから「やっぱり先生のおかげやわ」と言われる。当然のことながらSC一人の力で全校の流れが変わるはずもなく、先生方みんなの指導が効いてきたのだらうと思う。SCの実践(そうじパフォーマンス)がどれだけの影響を与えたのかわからないが、やりがいはしっかりと感じるができる。

中庭のそうじをする。若干の給食の食べかすや紙ひこうきなどが落ちていて、すこし汚れている。一部の生徒がまだ汚しているのであろう。教室のそうじを一生懸命やっていた女子生徒がわたしの方を笑顔で見ている。「まじめは、いいことだ」という雰囲気をついに抜けていきたいものだね、と思う。

(11/8)

①教頭先生と話を交わす

SC「ずいぶんゴミが減りましたね」～「最近学校内がずいぶん落ちついてきている。2年生のつっぱりたちも、エスケイプはするが悪さはしない。それらがゴミにも現れているのでしょ」。

②そうじ

保護者の面接などで今日は十分そうじの時間がとれなかった。夕方5時を過ぎ暗くなり始めるなか、急いで校庭をそうじした。練習をおえた野球部のやんちゃ^(註10)の1人が「ご苦労様です」と声をかけてくる。最後に中庭をそうじする。ゴミはほとんど落ちていないのですぐ終わる。入ったのとは別の窓から校舎に戻るため、建物の中にいた生徒に合図をして鍵を開けてもらう。走って開けに来てくれる。感激する。

(註10) いたずら者で、時計台に登って自転車を引っ掛けたりしたことがある。

(11/15)

①ハロー

中庭のそうじをしていると、つっぱりの一人ハローが窓から飛び降りて話し掛けてくる。ずいぶん素直な態度。SC「そうじは意地でやってる部分がある。ことの始まりは黄髪頭に『趣味でカウンセラーやっとなのか』と言われたことだ。黄髪頭は元気か?」～「ガソリンスタンドはやめたけど、今は建設現場で働いてる。まじめに働いているよ」。

(11/29)

①ナオミ

エスケイプ中のナオミがカウンセラー室にやってくる。相変わらず言葉少なだ。ナオミ「今は体育の時間。(授業に)入りにくい」～SC「戻るきっかけがつかめないんだな」。ナオミ、うなずく。間をもてあまして風なのでオセロに誘う。彼女の方がつよい。SCが考え込んでいるとちょこっとアクビをする。SC「一生懸命考えてるんだから、あくびしちゃ、いけないよ」。ナオミ、くすりと笑う。掃除の時間になったので、ナオミは部屋を出ていく。手を振ると、素直に挨拶を返す。

(12/13)

①ハローといっしょに校内をそうじする

授業中、カウンセラー室の扉がいきなり開いてハローが入ってくる。「暇や。なんか仕事ないけ?」。すかさず「掃除はどうか?」と尋ねると「いいよ」と答える。二人で校舎内のローカを掃除する。手洗い場前には大きなマットが敷いてあるが、埃が絡まりあってすごく汚れている。「外で叩こう」というハローの提案にしたがい、3階から玄関先まで二人で運ぶ。そこで掃除のおばさんと出会う。棒ずりを使えばよく取れることを教えてもらう。ハローの様子を見ておばさんも嬉しそうだった。チャイムが鳴り、掃除を終えて二人で引き上げていると、3人の先生と出会う。何処からか我々の様子を見ていたようで、3人とも嬉しそうな笑顔をハローに向けた。ハローの顔は戸惑いと照れでぶっくら棒だった。

②いつもきれいにしてくれて、ありがとうございます

放課後、カウンセラー室に居ると扉に人影が見える。声を掛けると男子生徒二人が顔を覗かせた。素直で真面目そうな生徒たちだった。「いつもきれいにしてくれて、ありがとうございます」。それだけ言うと、彼らは去って行った。

(12/20)

①ハロー

数日前掃除の時間にクラスメイトと一緒にハローが一生懸命そうじをしていた、ということを知った。

②そうじ

放課後外回りのドブ掃除をしていると、帰宅途中の男女一組の生徒から「がんばってください」と声を掛けられる。ボーイフレンドとガールフレンドなのだろう。「青春だー」と思いながら掃除をつづけていると背後で「さよなら」と声がする。振り向くと米米クラブだった。ずいぶんと青年っぽい顔つきになったなあと思う。

その後は久しぶりに運動場を掃除。部室棟裏もそれほど汚れてはいなかった。

(1/10)

①つっぱりたち

校舎内を掃除中、つっぱりグループたちと出会う。その中のまだあまり面識のない一人がわたしの坊主頭を撫でさせてくれと言う。お近づきの印なのだろう。ぐっと頭をつき出して撫でさせてやった。「うわー」と言いながら喜んでた。

放課後。下校途中のナオミとすれちがう。「さよなら」と挨拶をしてくれる。自転車置き場では米米クラブを見かける。乱暴に扱うので隣の自転車が2台倒れる。「こら、倒したらいかんが」と声を掛ける。

(1/24)

①女子つっぱり3人組

ナオミほか女子つっぱり3人組がカウンセラー室で給食をとっている。この後それぞれの担

任が指導をする予定だそうである。食べ終わると、少々乱暴な取り扱い方だが、食器を重ねて後始末に取りかかった。悪い子ぶってるけど、やっぱり女の子だなあ、と思う。途中ナオミが盛大なゲップをする。「大きいなー」と声を掛けると、すこし恥ずかしそうに照れ笑いを返してきた。その後しばらく彼女たちは所在無さげに座ったままだったので、わたしの方から食器を給食室へもっていくことを提案した。「ぼくが一緒に行くから、あと一人誰か行こう」。じゃんけんをして決めるように告げる。ナオミに決まる。彼女に食器をもたせ、わたしは先に立って部屋の扉を開けてやった。「最近元気か?」「うん」「それは、よかった」と、二言三言ことばを交わしながらローカを進んだ。途中ナオミは「寒い、寒い」と小さい声で呟いた。給食室に着き、わたしは奥に居る調理師のおばさんたちに「すみません」と声を掛けた。ナオミもそれに続けて「すみません」と言った。

カウンセラー室に戻るとあとの2人は先生からの指示で、昨日と一昨日したことについて作文を書いていた。そのうちの一人に「作文、見ていいか?」と声をかける。「いや〜」と答えるが、「そう言っても、見えてるよ」と言って、そのまま覗きこんだ。他校の友だち(おそらく男子生徒)と遊んだことなどが書いてあった。「〇〇中に友だちがいるんか?」と尋ねると、すこし警戒した様子。つづけて「いい友達なんか」と言う。「うん」と明るい返事が返ってきた。

②生徒指導部

床のタイルを剥がして窓の外に投げ捨てる事件があったらしい。生徒指導部ではそれをチラシにして全校に配布し、今日は犯人とおぼしきつっぱりたちと一緒にタイル貼りをしたらしい。とてもいい指導だと思う。

(1/31)

授業中ローカを巡視していると遠くに人影をみつける。あたりをつけてトイレを探すと米米クラブだった。保健室へ連れていく。養護教諭

と1人の女性教師がいた。米米クラブは最近、午前中はしいたけ栽培の現場で働いているそうである。担任も了承済みのことであるようだ。照れながらぶっさら棒に話す彼を見ながら、われわれ3人は「えらいぞ。がんばれよ」と思った。

(2/7)

①紙片ばらまき事件

学校に着きすぐおこなう午前の校庭掃除で、紙片があたり一面に散乱した光景と出くわす。溝や植え込み、雪の残る道路などに紙片は落ちていたので、多くは一枚一枚手で拾っていくしかない。「これは難儀だなー」と思うと同時に「いい加減にせえよ」ということばも口をついて出てくるが、気をとり直して作業にかかる。作業を終え、生徒指導係のてやんで一先生に報告するため、現物の入ったバケツを手を職員室へ向かう。先にてやんで一先生の方から「ありがとうございました」と声をかけてきた。互いの労をねぎらう思いで「生徒指導は、ほんと忍の一字ですね」と、わたしは言った。

②体当たりケジメ先生

放課後、残っていた校庭の掃除をすべて済ます。他はそれほど汚れてはおらず、全体がまた悪くなったわけではないとホッとす。その後校内を回る。一室で米米クラブたちと一緒にタイル貼りをしている体当たりケジメ先生を見かける。あとで「あれは、いいですね」と声をかける。

(2/21)

①ナオミ

放課後、ナオミともう一人のつっぱり女子生徒が帰宅せずに校庭内をウロウロしていた。小雨が降っていた。二人は自転車を玄関先に停め、校舎の中へ入っていった。ほんとうは停めてはいけない場所だが、雨をさけるためわたしは彼女たちの自転車をさらに軒下に移した。しばらくして校舎から出てきた二人に、わたしはあと2回で学校を去ることを告げた。「うそー、さびしくなる」とナオミは言う、鞆の中から

使い捨てカメラ（学校ではおそらく所持禁止品）を取り出し、わたしは彼女といっしょに写真に納まった。

（3/7）

①最後のそうじ

落ちていたゴミの量はずいぶんと少ない。自分がしてきた掃除との因果関係は定かではないが、とりあえず成果をかみしめながら、最後のそうじをした。

②つっぱりたちへの挨拶

校舎内で出会ったナオミと米米クラブの二人に別れの挨拶をする。

ナオミへ。ナオミ「さびしくなる」～「元気でやれよ」～「ありがとう」～「あんまり無茶するなよ」～「うん」。

米米クラブへ。SC「元気でやれよ。あんまり無茶するなよ」～「しないよ」。

（3/30）

先生方の送別会にわたしも呼ばれ、参加した。けじめ派の先生方からつぎのような言葉をいただき、わたしはスクールカウンセラーとして一つ階段を昇ったような気がした。

①体当たりケジメ先生

「これで、終わりだと思わないでくださいよ。これからは先生ではなく、（親しみをこめて）先輩と呼ばさせていただきます。――俺ほど奴らを愛している者はいない。教育とは愛です。先生は、掃除だけでなく、もっと中へ入って行かなければ。――俺らに対しても、論文を紹介するだけでなくもっと直接教えてくれなければ。――先生、これからは俺と勝負しよう」。

②てやんでー先生

「なぜ掃除をするかという、わたしの場合は、放っておくと他の者も乗じて学校のタガが外れてしまうからです。そこが先生と違うところ」。

③ご意見番先生

「ほんとうにありがとう。含蓄のあるカウンセラー室だより^(註11)だった」。

（註11）全校生徒向けに、最後に以下のような

な文をカウンセラー室だよりに書いた。

大部分の生徒にとってわたしは、スクールカウンセラーというより掃除のおっちゃんとして知られていたのではないだろうか。最近はずいぶん校内もきれいになってきたが、一時はひどい時期があった。（中略）わたしが〇〇中に来るのは週1回だったが、来たときは、一部の生徒たち（単なるふざけ組も多い）が校内を汚すのを上回るパワーできれいにしてやろうと心に決めて、そうじを続けた。きれいな方が気持ちいいに決まってるし、校内が汚れていくのを許すわけにはいかなかった。掃除のおばさんや先生方と共に、「けじめ」といういわば大人の意地を生徒たちに示したかったのだ。意地を示すにはなまじ声に出さぬ方がよかろうと思い、黙々と掃除をつづけたが、あるとき頭上からミルクが飛んできて危うくかかりそうになったことがあった。この時ばかりはさすがに腹が立った。（中略）しかし一方で「ご苦労さん」と声を掛けてくれる生徒が何人もいたり、また一生懸命教室のそうじをしている生徒が窓越しにわたしの姿を見つけニコッと笑いかけてくれることもあったりして、そういう時はわたしの方がずいぶん元気づけられた。元気づけられたといえ、つっぱり君たちとのつぎのようなエピソードもある。（中略）

自律ということばがある。大人からの自立がテーマである中学生のみなさんにとって、大事なことばである。社会の中で生きていくには守らなければならない様々なルールがあり、そして「けじめ」が必要とされる。それらを自分の中にしっかりと身につけ、自分で自分をちゃんと操縦できるようになっていないと、社会は相手にしてくれない。ときにはハネにされることもある。こんなことを言って「うざったい」と言われそうだが、必要だから言っている。みなさんが赤ちゃんだった頃、便所の始末の仕方からはじまり色々なことを大人から教わったはずだ。教わることはその時点においては他律であるが、それが自身の血肉となったとき、自律の

力へと変わっていく。はやく自立したいならば、先生や親、その他の大人、あるいは時には同級生たちからも発せられる、聞くべき忠告や叱責には素直に耳を傾けてほしい。それが強さというものだと思う。

Ⅲ 考察

① つっぱり生徒に関わるときの受容と指導

本稿では非行少年ということばの代わりに「つっぱり」という俗語を用いてきた。その理由は、非行が外面的な問題行動を指したことばであるのに対し、つっぱりは彼らの内的な心性をうまく表わしていると思うからである。彼らに対し「さあ、困っているのなら、話をしてごらん」式の態度は奏効しない。茶化されたり、馴れ馴れしく押し強い他人を利用しようとする自己中心的操作的態度(磯部, 1993)によって振り回される結果を招きやすい。このように、いわゆる受容的態度のみに基づく通常のカウンセリング的態度では彼らとうまくつながることができない理由を、藤掛(2000)はつぎのように説明している。人は強いストレス状況下におかれたとき二つの方向に反応する。一つは、へたりこんで他者に助けを求めることであり、あと一つは強がって「自分には問題はない」「自分は援助を受けるほど弱くない」とやせがまんを押し通すことである。通常のカウンセリングが適応するのは前者の人たちであり、後者に属する非行少年たちには有効でない。このように藤掛は「強がり・やせがまん」ということばを用いて非行少年の心性を表現するが、「つっぱり」ということばはこれらの心性を一語でうまく表現していると思うのである。

では、どうすればわれわれは彼らとうまくつながることができるのだろうか。筆者はカウンセラーによる実践報告よりも、その他の人たちの所謂「身体を張った」関わりに感銘を受けることが多かった。たとえば、荒れた中学を立て直した校長の実践(塩野入, 1993)、元暴走族総長の体当たり子直し(伊藤, 1998)、極道の妻か

ら弁護士になった大平(2000)の立ち直りを支えたおっちゃん、等の関わりである。これらの関わりに共通することは、身体レベルで伝わるような愛情に裏打ちされた、きちんと叱ることのできる厳しさである。言いかえれば、相手の犯したイケナイコトに対して拒絶や攻撃で反応したりせず(真の意味での受容)、「それはダメだ。こうしなければならぬ」(指導)と論ずることである。河合(1995)はこれを「血のかよった壁」に例えている。本論文では元氣なんかでねえよが言ったつぎのことばがこのことを指していると思われる。「傘をさして追いかけているようじゃダメだ。先生のプライドを捨てて、追いかけてこなければ」「姉御はダーと追いかけてきて恐かった」。

すこし視点を変えて、上述のことがらを考えてみたい。彼らに対し「さあ、困っているのなら、話をしてごらん」式の態度が奏効しないことは既に述べた。このような態度でこちらがマジで彼らとつき合おうとしても、彼らは全然マジにはならない。しかし彼らマジになるときがある。それがつっぱっている時なのだ。「相手の自発的な表現を尊重し、それに添って相手と関わっていく」というカウンセリングの原則にしたがえば、しばしば非行行動(反道徳的行動)として表わされるつっぱりこそ、彼らが示す自発的な自己表現であり、ここが彼らとつながることのできる接点だと考えることができる。マジでつっぱっている彼らに対してこちらマジで対応しようとするれば、愛情に裏打ちされた一歩も譲らぬ態度が要求される。

彼らが反道徳的行動をしてもきちんと注意せずそのまましておくのは、決して受容などではなく単なる放任である。しかし、注意をするといっても力で抑えこむ指導では、たとえ教師の力が勝っても「おれの一喝はよう効くのう」と教師の自己満足に終わるだけで、いじめの陰湿化など新たな問題を生じさせてしまう(伊藤, 1984)。このような指導は公安の仕事としてはそれなりの意味があるかもしれないが、つっぱ

り生徒に対する教育としては機能しがたい。むしろつっぱり生徒に対して打たれ稽古、かわし稽古をつけているようなもので、彼らのつぱりの鎧を鍛えているだけである。その結果、一段と強くなった彼らにいつ反撃されるかもしれない。このような指導に陥りがちな教師は一般的に、気の強い、有能な人たちが多くに思われる。彼らと関わる時、われわれ大人は強さということについていま一度自身を振り返ってみる必要があるだろう。

以上の考察を踏まえて、つっぱり生徒たちに対するSC(筆者)の関わりをつぎに考察したい。SCがマジになった転回点は、つっぱりたちに絡まれ、黄髪頭から「趣味でカウンセラーやっとなるか」と言われたことであった。SCはここでまず、相手の毒に動じず、嘘をつかない(不自然な愛想などはしない)というカウンセリングの原点を再確認した。それから、汚された学校を徹底的にきれいにするという掃除活動がはじまった。前掲の、筆者が感銘を受けた先達のまさしく身体を張ったface to faceの関わりと比べると迫力は乏しいが、いくら汚されても一歩も譲らぬという決意はもっていた。また、学校を汚す彼らに対して拒絶や攻撃心をもつことはなかった。掃除の折、はみ出した彼らの自転車をきれいに並べ替えるときなどは、むしろ世話を焼いているような気持だった。(ただ、ふざけ組に対しては否定的な感情を抱くことがあったが。)このように、SCがおこなった掃除は受容と指導の両者を備えた活動であったと考えることができよう。その結果、つっぱりたちと少しづつ関係がとれるようになっていったことは経過報告に示したとおりである。なお、掃除をとおしてつっぱり生徒と関わった実践は高校教師の小林(2001)も報告しており、その実践も受容と指導の両者を備えたものである。

さて、送別会で体当たりケジメ先生がSCに対して「掃除だけでなく、(生徒に対しても教師に対しても)もっと中へ入って行かなければ」と言っている。もっと体当たりの「熱さ」

を示してほしかった、ということであろう。これは、身についたカウンセラーの中性的態度が影響している部分もあるが、個人の資質の問題もある。「愛情に裏打ちされたハラのすわった態度」は一朝一夕に磨かれるものではない。永遠の努力目標であると考えている。ただ、個々の力はそれほど強くなくても教師全体がこのような方向に向かって努力をつづけるならば、大きな力となろう。「けじめ派 VS 受容派」の対立を収めるため、特にけじめ派の教師たちから理解を得られるよう努めたSCの努力は、この点においてある程度の成果を得たと考えてよいのではないだろうか。そしてSCの掃除を応援してくれた生徒たちや汚すのを控えるようになった生徒たちも、学校全体の風紀の改善という点でわれわれに協力してくれたように思えるのである。

②新しい道徳教育の模索

SCの掃除活動はつっぱり生徒への関わりから始まったが、彼らに乗じて校内を汚すふざけ組など一般生徒の一部にも漂うケジメのなさを感じるにしたがい、関心は生徒全体に礼節や規律をつけさせることへと向かっていったことは、すでに述べた。この項では、他の多くの人たちも指摘する教育現場における生徒のモラル(ケジメ、礼節)の低下についてその原因の一端を考察し、つぎに一つの処方箋として「自問清掃」という活動を紹介したい。

まず生徒のモラルの低下の原因について述べたいが、教育行政的なことに関しては筆者は専門ではないので、わが国の教育事情のみならず世界の教育事情についても調査研究をおこない、グローバルな視点から戦後教育の自由主義と規律の低下について論じている沖原(1992)の2編の論文を、すこし長くなるが以下に引用したい。

「戦後、我が国の教育は、アジア型教育から欧米型教育へと大きく転換してきた。欧米型教育の特色は、いうまでもなく自由ということにある。戦後の教育では、教育の自由が尊重され、

子どもの自主性に基づいた進歩的な教育活動が全国的に広く展開されてきた。それは、いわば戦後教育の輝かしい側面であった。しかし、教育において自由を尊重することは大切であるが、それが行過ぎると、極端な児童中心的な自由主義の教育となり、教育の荒廃現象が起こってくる (p.69)。「伝統的にしつけの厳しさでは定評のあった西ドイツでも、戦後、民主化・自由化の行き過ぎから、一切の権威や抑圧を排除した反権威主義教育がもてはやされ、学校では、自由というより放任に近い状態が一般的となり、規律が著しく低下している (p.63)。「現代社会は許容社会とも呼ばれているように、程度の差こそあれ、人々の問題行動に対して余りに許容的、黙認的、放任的な社会である。そして、そこで行われている教育には、強制しない教育、大目に見る教育、叱らない教育、罰しない教育という四つの特色が認められる。そのために、欧米諸国では、子どもに対して余りにも許容的になり、自由と放縦をはきちがえた親や教師が多く出現したと言われている (p.71)」。

上記の沖原の論説から見えてくることは、日本に限らず真の自由主義を育てることの難しさである。と同時に、ここには「自主性」や「しつけ」といった心理学のテーマが潜んでいることがわかる。ただ、「自主性の尊重 VS しつけ」といった対立的構図で捉えてはならないことは注意しなければならない。SCが2年間の任務を終え学校を去る時「カウンセラー室便り」で示しているように、自主性(自律性)が育つプロセスはまず教えられ、しつけられることから始まる。「こうすべきだ」という他者の意図を受けることはその時点においては他律であるが、自身の主体的な選択というフィルターをおとして自身のなかに同化したとき、それは自律の力となる。教える側が自己の信念に基づき正しいと思うことを伝えることに躊躇する必要はないが、教わる側がそれを主体的に取りこむまでのプロセスを尊重しなければならない。つまり、教える時には相手の心に添うことが必要である。

以上をまとめると、戦後教育における生徒のモラルの低下は自由主義の欠陥によるものではなく、自由主義を根底で支える個人の自律性を育てることに十分な成果をあげることができなかったためと考えることができる。

筆者は掃除によってつっぱり生徒と関わることができた以外に、掃除によって全校生徒のモラルの向上に寄与することができたのではないかと思っている。減少したゴミの量がその証拠である。しかし筆者は無言の掃除パフォーマンスを示しただけであり、直接的な指導を生徒にしたわけではないので、生徒たちに幾許かの影響を与えたとは思いが限界も感じていた。本稿をまとめるにあたり文献にあたっていた折、「自問清掃」(竹内,1991)というユニークな道徳教育実践の存在を知った。具体的な実践方法を示しているだけでなく、背後にある理念も生徒の自律性に働きかけながら道徳教育をおこなうという点で、たいへん興味をもった。これからのスクールカウンセリング活動の中で、教師たちと協同しながらこの自問清掃を試みることであればと思っている。

文 献

- 藤掛明 2000 日本心理臨床学会第19回大会 ワークショップ「描画を使った非行・犯罪臨床」での講義
- 磯部修一 1993 有機溶剤依存の入院治療経験より 心理臨床学研究, 11, 122-133.
- 伊藤友宣 1984 きびしい教育は非行を防げるか 児童心理, 38, 471-478.
- 伊藤幸弘 1998 体当たり子直し 小学館
- 河合隼雄 1995 臨床教育学入門 岩波書店
- 萱原道春 2000 養護教諭とスクールカウンセラー 金沢大学教育学部紀要(教育科学編), 49, 15-29.
- 小林昭文 2001 吸い殻を一本一本拾うような地道な取り組みの中で 月刊生徒指導, 31(8), 17-20.
- 沖原豊 1992 日本に上陸した校内暴力 現代の

- エスプリ, 302, 55-65. 講談社
- 沖原豊 1992 日本教育の針路 現代のエスプリ, 302, 68-74. 塩野入靖夫 1993 教師が変われば生徒が変わる クレスト社
- 大平光代 2000 だから、あなたも生きぬいて 竹内隆夫 1991 自問活動のすすめ 第一法規